

日本における北欧文学の受容—セルマ・ラーゲルレーヴを中心に

東京理科大学（非常勤） 中丸禎子

2009年11月28日

於：大阪大学箕面キャンパス

序 問題意識と方法

対象：日本におけるセルマ・ラーゲルレーヴ（Selma Lagerlöf, 1858-1940）と北欧文学の受容

目的：北欧とラーゲルレーヴのステレオタイプ・イメージが成立する過程を明らかにする

日本近代史の中にラーゲルレーヴ研究を位置づける

北欧文学研究の立場から、日本近代を批判する端緒を開く

方法：ラーゲルレーヴの邦訳作品の傾向、訳者の関心のあり方と日本史・日本文学史上の立場の考察

参照資料：〈表1〉上原進「セルマ・ラーゲルレーヴ原作の邦訳書リスト¹」（原作の刊行年順、『ニルスのふしぎな旅』（*Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige*, 1906-07）のみ別枠）

〈表2〉ラーゲルレーヴ主要邦訳リスト（邦訳の刊行年順）

〈表3〉山室静著作・翻訳リスト

問題点：邦訳者の知名度と翻訳数のアンバランス

- ・ 評価の定まった作家・翻訳家は、業績全体におけるラーゲルレーヴの比重が低く、彼らの関心のあり方を直接知ることが困難
- ・ ラーゲルレーヴをライフワークとした翻訳家は、他の業績や二次文献が少なく、彼らの日本史・日本文学史上における位置を規定することが困難

解決方法・考察の方針：

- ・ 著名な翻訳家→ラーゲルレーヴへの関心も、文学全体の業績と矛盾するものではないと考え、特に北欧文学の占める位置に注目した上で、業績全体を把握
- ・ 知名度の低い翻訳家→彼らが属するグループの北欧・北欧文学との関わりと、日本史・日本文学史上に占める位置を確認

考察の対象

1. 新劇運動における北欧演劇の受容（明治時代）
2. エレン・ケイの女性解放運動・児童教育運動への影響（大正時代）
3. 無教会グループの平和主義への関心（昭和初期）

¹ 本研究の資料収集および執筆に際しては、このリストを出発点・足がかりとした。ラーゲルレーヴの邦訳は、現在では多くが入手困難であるばかりか、出版時期が古く、電子情報化されていないものも多いため、存在の確認も容易ではない。上原氏は、ラーゲルレーヴの邦訳を古書店で丹念に探し、多くを所有しているほか、入手困難なものについても、国会図書館などで現物の確認に努めている。本リストは未出版だが、氏のご好意を得て使用・掲載した。この場を借りて、リストの使用許可に感謝するとともに、氏の長年にわたる地道な努力に敬意を表したい。

4. 山室静による北欧文学受容・ラーゲルレーヴ紹介（戦後）

1. 新劇運動における北欧演劇の受容（明治時代）

最初期のラーゲルレーヴ翻訳：小山内薫、森鷗外→当時の二人の共通点＝新劇運動

新劇運動

江戸時代の演劇＝歌舞伎：民衆に人気、知識層からは「低俗」な娯楽とみなされる

1880年代：演劇改良運動→欧化主義の一環、歌舞伎の西洋化・ブルジョワ化を目指す

「演劇改良会」（1886年発足）

会員：末松謙澄（1855～1920）、井上馨（1836～1915、当時外務大臣）、渋沢栄一（1840～1931）、外山正一（1848～1900）、依田学海（1833～1906）、福地桜痴（1841～1906）、森有礼（1847～89）

後援：伊藤博文（1841～1901、当時内閣総理大臣）、大隈重信（1838～1922）、三井弥之助（別名三井養之助、1856～1921）、大倉喜八郎（1837～1921）、陸奥宗光（1844～97）、千葉勝五郎（1833～1903）

成果：天皇の歌舞伎鑑賞（1887年）、歌舞伎役者の地位の向上、洋式劇場の普及、劇場経営の近代化

1900年代：新劇運動→、歌舞伎（旧劇）や新派劇（自由民権運動の思想を宣伝するための劇）に対し、西洋の演劇を模した新しい演劇の確立を目指す

「文芸協会」（1906年発足）：島村抱月（1871～1918）、坪内逍遙（1859～1935）

「自由劇場」（1909年発足）：二代目市川左團次（1880～1940）、小山内薫（1881～1921）

「近代劇協会」（1912年発足）：上山草人（1884～1954）、顧問：坪内逍遙、森鷗外（1862～1922）

上演演目：ヨーロッパ（北欧を含む）の演劇の翻訳：シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）、ワイルド（Oscar Wilde, 1854-1900）、ショウ（Bernhard Shaw, 1856-1950）、ゴーリキー（Maxim Gorki, 1868-1936）、チェーホフ（Anton Chekhov, 1860-1904）、メーテルリンク（Maurice Maeterlinck, 1862-1949）、ハウプトマン（Gerhart Hauptmann, 1862-1946）、イブセン（Henrik Ibsen, 1828-1906）、ストリンドベレイ（August Strindberg, 1849-1912）、ビョルンソン（Bjørnstjerne Bjørnson, 1832-1900）

イブセンの影響：

1906年に死去：島村抱月の追悼記事「イブセンと社会的哀憐」（〈東京日日新聞〉、5月28日）

〈早稲田文学〉第七月号で追悼特集

イブセンブーム：1907年：小山内薫、〈新思潮〉を創刊→同人による「イブセン会」

1909年：『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』（*John Gabriel Borkman*, 1896）上演（「自由劇場」第一回公演、翻訳：森鷗外、演出：小山内薫、主演：市川左團次）

1911年：『人形の家』→2. を参照

1912年：『幽霊』（*Gengangere*, 1881）上演（「演芸同志会」、翻訳：森鷗外）

2. 女性解放運動と児童文学へのエレン・ケイの影響（大正時代）

1920年前後のラーゲルレーヴ翻訳：特徴1. 児童文学としての翻訳が多い→「児童文学作家」としての受容の原点

特徴2. 〈青鞥〉メンバー：小林哥津子（1894～1974）、野上彌生子（1885～1985）、神近市子（1888～1981）→女性解放運動

その他：福永挽歌（1886～1936）→女性解放運動と児童教育運動の双方に関わる

女性解放運動

1880年代：キリスト教（1873 解禁）の影響→矢嶋楯子（1833～1925）の「婦人矯風会」（1886年結成）、近代家族制度（一夫一婦制、海外醜業婦取り締まり、廃娼など）を求める

〔背景〕廃娼運動と自由民権運動（植木枝盛（1857～1892）、島田三郎（1852～1923））の結びつき

↓

政治的

法的な一夫一婦制の確立：教育勅語、民法（共に1890年）運動沈下

女性の政治活動の制限：集会及結社法（1890年）、治安警察法（1900年）

文化的

女性作家・詩人の注目：樋口一葉（1872～1896）、與謝野晶子（1878～1942）の活躍

明治女学校²校長・巖本善治（1863～1942）〈女学雑誌〉→「子供のはなし」（のち「小供欄」、「児籃」に名称変更）欄で若松賤子（1864～96）訳『小公子』、イソップ、グリム、アンデルセンの童話

1900年代：政治的

社会主義の立場からの女性解放運動：山口孤剣（1883～1920）、堺利彦（1871～1933）、福田英子（1865～1927）→明治憲法下の家族制度＝天皇制の根幹、女性解放運動の弾圧

文化的

ヨーロッパ文学における女性作家の活躍、作品内の女性描写

- ・森鷗外「椋鳥通信」（〈スバル〉1909年3月～1913年12月）：ヨーロッパの最新のニュースを紹介→女性作家・女優の活躍、ラーゲルレーヴ＝女性初のノーベル文学賞受賞（1909年）として紹介
- ・イプセン『人形の家』（*Et Dukkehjem*, 1879）：1911年9月、「文芸協会」により日本初演（主演：松井須磨子（1886～1919）→女優を起用した初めての本格的な演劇）、11月再演
1913年「近代劇協会」の公演『ノラ』（森鷗外訳、主演：衣川孔雀（1896～1982）

1911年9月：〈青鞥〉創刊：平塚らいてう（1886～1971）

- ・イプセンへの関心：メレジコウスキー「ヘッダ・ガブラー論」翻訳（訳者不明、創刊号）
平塚らいてう、保持研子「ヘッダ・ガブラ合評」（第二号（1911年10月））
「ノラ特集」（1912年1月号）
『幽霊』論（1912年3月号）

否定的な世論と弾圧→「女性の自己表現のための文芸」から「女性を縛る社会制度」へ

- ・エレン・ケイ（Ellen Key, 1849-1926）への関心：「女性問題特集」（1913年1月号）→平塚らいてう訳『恋愛と結婚』（*Livslinjer I. Kärleken och äktenskapet*, 1904）連載開始
伊藤野枝（1895～1923）訳『恋愛と道徳』（1913年5月号）
山田わか（1879～1957）訳『児童の世紀』（1915年7月号、10月号～1916年2月号、未完）

児童教育運動

19世紀末：イギリス、アメリカの「新教育（New Education）」運動（従来の書物中心教育を批判し、児童の自主性・主体性を重んじる）←エレン・ケイ『児童の世紀』（*Barnets århundrade*, 1900）：女性が家庭において母

² ミッションスクールで、野上彌生子、羽仁もと子（1873～1957、「自由学園」を創立）、相馬黒光（1876～1955、新宿中村屋を創業）らを輩出した。巖本は、1887年から、廃校する1904年まで第二代目の校長を務めた。

親として果たす、子どもを生み育てる役割の評価→ラーゲルレーヴ『ニルスのふしぎな旅』(Nils Holgerssons underbara resa genom Sverige, 1906-07) = 社会科の教科書

比較：フレドリカ・ブレーメル (Fredirka Bremer, 1801-65)：男女の絶対的な同権を主張

第一次世界大戦期：「新教育」運動が各国に波及

↓ [背景] 大正デモクラシー

「大正自由教育運動」(教師中心の「注入主義」を廃し、子ども中心の「新教育」を目指す)

1921年：自由学園創立(この他にも斬新な教育方法を取り入れた学校が多数新設)

1918年：鈴木三重吉(1882～1936)、〈赤い鳥³〉創刊

3. 無教会グループの平和主義への関心(昭和初期)

ラーゲルレーヴ翻訳の特色：複数の作品を訳した訳者が少ない→訳者のラーゲルレーヴへの関心は個々の作品への

それにとどまり、作家への関心には発展しなかった

複数作品を手がけた訳者→キリスト教徒(または、キリスト教に強く影響された経験を持つ者)が多い：生田春月(1892～1930)、小山内薫(洗礼は受けていないが、第一高等学校在学中に内村鑑三の聖書研究会に参加、〈聖書之研究〉の編集に携わる)、香川鉄蔵(第一高等学校在学時に、内村の影響)、イシガ・オサム(矢内原忠雄、賀川豊彦に私淑)、中村妙子(1923～)

→「キリスト教文学」としての受容の原点

香川鉄蔵(1888～1969)：日本におけるラーゲルレーヴの著作権所有者。『飛行一寸法師』(1918年)は、日本で最初の『ニルスのふしぎな旅』の翻訳。「日本セルマ・ラーゲルリョーフ会」を創設(1963年)、日本ラーゲルレーフ会」を創設(前掲会改組、1964年)、スウェーデン一周旅行への招待(スウェーデンの「セルマ・ラーゲルレーヴ協会」、ラーゲルレーヴ生誕100年記念、1958年)

イシガ・オサム(1910～)：抜き出した翻訳数。他の邦訳が存在しない作品、とりわけ児童文学以外の作品を多く手がける。内村鑑三、矢内原忠雄、賀川豊彦、武者小路実篤、ガンジー、トルストイ、ロマン・ロランの影響下でキリスト教を背景とする反戦平和主義を確立。1942年、『エルサレム』翻訳完了と同時に兵役拒否を表明。戦後も平和主義文学としてラーゲルレーヴを訳す。

香川、イシガの特色：スウェーデン語からの直訳、複数冊の訳、業績がほぼラーゲルレーヴ翻訳のみ、キリスト教的な平和主義としての翻訳

キリスト教

江戸時代：鎖国政策

明治初期：国家神道をいただく天皇中心の一元国家→キリスト教の禁止

1873年：キリスト教解禁(不平等条約改正のため)→伝導の開始、横浜バンド、熊本バンド、札幌バンド

雑誌の刊行、学校運営、慈善事業など→受洗しない日本人に対しても西洋近代の家族観や社会参加のあり方

³ 賛同者に、泉鏡花、芥川龍之介、小山内薫、森鷗外、北原白秋、島崎藤村、小川未明、谷崎潤一郎、野上豊一郎、野上彌生子、有島武郎、佐藤春夫、菊池寛、三木露風、山田耕筰など。

を示す

↓↑

1890～1910年頃：キリスト教の「試練の時代」

- ・キリスト教を邪教ととらえる風潮→内村鑑三不敬事件（1891年）：東京帝国大学教授井上哲次郎（1856～1944）「一神教であるキリスト教は現人神としての天皇をいただく日本の国体とは相容れない」→批判的な世論
- ・「新神学論争」→キリスト教界の動揺
- ・大逆事件（1910年）：大石誠之助（1867～1911）らキリスト教徒が無実の罪で処刑

→キリスト教徒自身が信仰のあり方や教義について再思考し、独自の思想を展開

- ・「福音主義論争」（1901～1910）
- ・救世軍来日（1895年）
- ・社会改良への努力（孤児院・病院の建設や貧民救済など）→キリスト教社会主義（木下尚江（1869～1973）、阿部磯雄（1865～1949）、賀川豊彦（1888～1960））、社会主義（1906年の社会党創立時のメンバーの多くがキリスト教徒）
- ・内村鑑三、「無教会主義」を展開・確立：「基督信徒の慰め」、「求安録」（以上1893）、「Justification of the Corean War（日清戦争の義）」、「Japan and the Japanese（代表的日本人）」（以上、1894）、「How I became a christian（余は如何にして基督信徒となりし乎）」（1895）

1897～：黒岩涙香（万朝報）の英文欄主筆→1903年、日露戦争の「非戦論」を唱えて退社

1903～：雑誌〈聖書之研究〉（1900～1930）、「聖書研究会」→エンリコ・ダルガス（Enrico Dalgas, 1828-1894）の紹介（『デンマルク国の話—信仰と樹木とをもって国を救いし話』（1911）、『樹を植ゑよ』、『西洋の模範国デンマルクに就て』（以上1924））

→「理想の農業国」としてのデンマークのイメージ

→フォルケホイスコレへの関心：渡瀬寅次郎（1859～1926）、平林広人（1886～1986）、加藤完治（1884～1967）、松前重義（1901-1981）→東海大学

→一高生・東京帝大生への影響→のちのキリスト教界・政界・経済界を担う人物を輩出：矢内原忠雄、南原繁、藤井武、黒崎幸吉、塚本虎二、江原万里、三谷隆正、前田多門、森戸辰男、鶴見祐輔

- ・矢内原忠雄（1893～1961）：東京帝国大学経済学部教授（1920年～）、「帝国大学聖書研究会」設立（1923年）、軍国主義を批判して辞職（1937年）、雑誌〈嘉信〉を発行。戦後、東京帝国大学に復帰、後、東京大学総長（1951年～57年）。

4. 山室静による北欧文学受容・ラーゲルレーヴ紹介（戦後）

以上三つの受容の特色：文学以外の活動の副産物

「北欧文学」の枠組みの未確立

山室静（1906～2000）：昭和初期にマルクス主義運動に関わり、「転向」。〈近代文学〉（1946～1964）創刊同人。

日本で初めての包括的・体系的な枠組みとしての「北欧文学」。エッダ（Edda）、アイスランド・サガ（isländiska saga）、ビョルンソン、アンデルセン（Hans Christian Andersen, 1805-75）、ヤコブセン（Jens Peter Jacobsen, 1847-85）、ウンセット（Sigrid Undset, 1882-1949）、ラックスネ

ス (Halldór Kiljan Laxness, 1902-1998)、トーベ・ヤンソン (Tove Jansson, 1914-2001)、リンドグレン (Astrid Lindgren, 1907-2002) などの翻訳。北欧文学通史『北欧文学の世界』(1969)、エッセイ『北欧文学ノート』(1980)。→〈表3〉

山室のラーゲルレーヴ受容：『ニルスのふしぎな旅』、『幻の馬車』(Körkarlen, 1912) の翻訳。エッセイ「セルマ・ラーゲルレーヴ素描」(『北欧文学の世界』所収)、「ラーゲルレーヴ生誕百年に寄せて」(『北欧文学ノート』所収)。

受容の特色：平和主義→冬戦争(1940)中の最期の言葉「平和になるのでしょうか」→石丸静雄、万沢まきら戦後前近代、母性、ヒューマニズム、牧歌
の翻訳者に共通

ラーゲルレーヴ女史の場合は、その源泉は深く祖国の土壌と民族に根ざしたものであって、かつはそれがさらに女性的、という以上に母性的なものとして、広やかで深い愛情に一切を抱擁する人間肯定に支えられた、素朴で直接的な本質把握をもち、おのずと偏奇する事を避けえていたと言えよう。かくて彼女のヴィジョンは、時にひどく幻想特異に見えながら、豊かな人間性を、従って現実性を、それ故に普遍性を失わない。(「セルマ・ラーゲルレーヴ素描」、252 ページ)

山室の「近代」へのこだわり：〈近代文学〉という雑誌
東洋古典と日本近代文学

[カトリックの洗礼を受けない理由]

死ぬまでは一人の弱い人間としての迷いと不安の中にも、自己の理性に従って歩んでゆきたいとする近代人の愚かな誇りがやはり捨てきれない。(「北欧文学と私」、『北欧文学ノート』所収、72 ページ)

ウンセットは、その大胆な女性心理の探究や、執拗で緻密な、しかも見事な文化的展望に支えられた作品構成等に於いて、現代の問題の肉薄という点で、また作家としての力倆に於いて、おそらくはラーゲルレーヴ女史をも凌ぐであろう。(中略)作家に苦渋の翳をおびさせ、作品をも書き悩ませて、さまざまの強力な抵抗を排することによってのみ辛うじて作品構成の場を見出せるような、近代の作家に多少ともつきまとっている事情は、彼女にはほとんど見られない。(「セルマ・ラーゲルレーヴ素描」、250 ページ)

山室にとってのラーゲルレーヴ=感性を共有する「心のふるさと」の「なつかしい作家」だが、近代人としての問題意識は共有できない作家

まとめ

4つの北欧受容の共通点：西欧とは別の近代化モデルとして北欧を「発見」

→実像とは必ずしも一致しないプラスのイメージ

政治性・社会性・問題点の捨象

参考文献

A. 概観

- ・ 上原進『セルマ・ラーゲルレーヴ原作の邦訳書リスト』、1998年11月作成、2008年11月改版。
- ・ Thunman, Noriko: *Selma Lagerlöf i Japan*. I: Vinge, Louise (red.): *Selma Lagerlöf seen from abroad. Selma Lagerlöf i utlandsperspektiv. Ett symposium i Vitterhetsakademien den 11 och 12 september 1997*. Kungl. Vitterhets Historie och Antikvitets Akademien. Konferenser 224. 1998, s. 41-60.
- ・ 家永三郎ほか編『近代日本思想史講座 1 歴史的概観』筑摩書房、1960年。
- ・ 加藤周一、久野収ほか編『近代日本思想史講座 4 知識人の生成と役割』筑摩書房、1959年。
- ・ 亀井勝一郎、竹内好ほか編『近代日本思想史講座 7 近代化と伝統』筑摩書房、1959年。
- ・ 鳥海靖、野呂肖生、三谷博、渡辺昭夫『現代の日本史』山川出版社、1997年。

B. 新劇運動

- ・ 大笹吉雄「演劇の変革」、久保田淳ほか編『岩波講座 日本文学史 第十一卷 変革期の文学 III』、岩波書店、1996年、155～175ページ。
- ・ 尾崎宏次「現代の演劇—明治以後の戯曲と新劇運動—」、『岩波講座 日本文学史 近代 I 第十一卷』所収)、1958年。
- ・ みなもごろう『演劇・戯曲の近代』、久保田淳ほか編『岩波講座 日本文学史 第十一卷 変革期の文学 III』、岩波書店、1996年、145～169ページ。

C. 女性解放運動・児童文学

- ・ 〈青鞥〉、青鞥社、1911年9月～1916年2月。
- ・ 井上輝子、上野千鶴子、江原由美子、大沢真里、加納実紀代編『女性学辞典』、岩波書店、2002年。
- ・ ジャネット・K・ボールズ、ダイアン・ロング・ホーヴェラー編著『フェミニズム歴史辞典』、水田珠枝、安川悦子訳・監修、明石書店、1996年。
- ・ らいてう研究会編『「青鞥」110人の群像』、大修館、2001年。

D. キリスト教

- ・ イシガ・オサム『神の平和—兵役拒否をこえて—』新教出版社、1971年。
- ・ 内村鑑三『内村鑑三全集』、岩波書店、1984年。
〈使用文献〉
「デンマルク国の話 信仰と樹木とをもって国を救ひし話」、第18巻、304～315ページ。
「樹を植ゑよ」、第28巻、316ページ
「西欧の模範国デンマルクに就いて」、第28巻、376～378ページ。
- ・ 海老沢有道、大内三郎『日本キリスト教史』、日本基督教団出版局、1970年。
- ・ 遠藤祐、高柳俊一、山形和美ほか編『世界日本 キリスト教文学事典』、教文館、1994年。
- ・ 香川鉄蔵先生追悼集刊行会編『香川鉄蔵』、香川鉄蔵先生追悼集刊行会発行、1971年。
- ・ 久山康編『近代日本とキリスト教 明治編』、基督教学徒兄弟団発行、創文社、1956年。
- ・ 久山康編『近代日本とキリスト教 大正・昭和編』、基督教学徒兄弟団発行、創文社、1956年。
- ・ クラウス・クラハト、克美・タテノクラハト『クリスマス どうやって日本に定着したか』、角川書店、1999年。
- ・ 関根正雄編著『内村鑑三 人と思想』、清水書院、1967年。
- ・ 日本基督教団『キリスト教人名辞典』、日本基督教団出版局、1986年。

- ・ 日本キリスト教歴史大辞典編集委員会『日本キリスト教歴史大辞典』、教文館、1988年。
- ・ 森岡清美『明治キリスト教会形成の社会史』東京大学出版会、2005年。

- ・ **E. 山室静**
- ・ 小田切進発行、瀬沼茂樹編『「近代文学」復刻版 解説・細目・執筆者索引』所収、日本近代文学館、1981年。
- ・ 唐沢富太郎『学生の歴史』、「唐沢富太郎著作集3」、ぎょうせい、1991年。
- ・ 川西政明「解説 おだやかで普遍的な世界」、荒井武美「山室静年譜・著作目録」、山室静『評伝森鷗外』所収、講談社文芸文庫、1999年、262ページ～299ページ。
- ・ 長谷川如是閑『戦争と文学者の責任』〈人間〉第一巻第四号所収、鎌倉書店、1946年4月。
- ・ 守屋典郎『日本マルクス主義理論の形成と発展』青木書店、1971年。
- ・ 山室静『北欧文学の世界』東海大学出版会、1969年。
- ・ 山室静『山室静著作集1 現在の文学の立場』冬樹社、1972年。
- ・ 山室静『北欧文学ノート』東海大学出版会、1980年。